

医史学における複言語主義のすすめ

日本医史学雑誌第五十一巻第三号
平成十七年十二月二十日発行

平成十七年七月二十五日受付

泉 彪之助

介護老人保健施設 陽翠の里

私が、複言語主義 (plurilingualism) という耳慣れない言葉を知ったのは、『多言語社会がやってきた』という本の中の山川智子氏の解説であった。¹⁾氏によれば、複言語主義は多言語主義 (multilingualism) と異なった概念を示すために欧州審議会で定めた用語であるという。その定義によると、多言語主義は英語、ドイツ語、フランス語等を、母語話者を到達目標として、学校で正規に学ぶという考え方であり、これに対して複言語主義は、もう少し現実的なレベルを到達目標として、各言語を学校だけでなく生活全体の中で学ぶという考え方である。

医史学では、ギリシャ語、ラテン語、オランダ語などの専門家がおられて、私たちはそれらの方々から多くの恩恵をこうむっている。原典の正確な読みは、これらの方々の指導がなければ不可能である。だが、これらの専門家のレベルに達することはむずかしいし、また多くの医史学研究者はそれほどの必要は感じないだろう。しかし医史学研究者が史料・文献に接して、その言語を知りたいと思う機会が多いに違いない。そうした機会を手がかりとして、たとえ専門家のレベルに達しなくとも、いろいろな言語を学んで行こうというのがここで言う複言

語主義のすすめである。ヨーロッパの学界では、ある国の歴史を学ぶときはその国の言語を学ぶことからはじめるというが、私たちもそれにあやかりたい。

私が、医史学研究者に複言語主義をすすめる理由は二つある。ひとつは、この本の題名の通り、「多言語社会がやってきた」ことである。⁽¹⁾⁽²⁾ 私たちが日本医史学会総会でイティッシュ語で書かれた医史学史料について報告したとき、⁽³⁾ 渡部幹夫教授は東京都がエイス広報資料を七か国語で出していることを教えてくださり、後で現物を送ってくださった。これらの資料を理解するには、それぞれの言語の初歩的な知識が必要であらう。

もうひとつの理由は、一般史の領域での二つの潮流である。一般史では、(一)歴史のアナールの理解、(二)ヨーロッパ中心主義史観からの脱却、が、当然のこととなっている。歴史のアナールの理解とは、歴史を支配者や政治家、英雄のものとしてではなく、庶民のものとして理解しようということである。そこでは庶民の日常的資料が重要な史料となり、その史料に関連した言語の知識が必要になる。

ブローデルの『地中海』のように、ヨーロッパの学界自体が新たな視野を展開しているが、日本では過去のヨーロッパ中心主義史観からの脱却が求められており、そのことは大学生向きの教科書にまで書かれている。⁽⁴⁾ これらの傾向には、今まで注目されなかった言語の、新しい理解が必要であらう。

今、日本では英語さえ分かればすべての外国事情が分かるように言われているが、英語は広域コミュニケーション言語のひとつに過ぎない。こうした広域コミュニケーション言語の外に、各言語による広大な文化が広がっているし、広域コミュニケーション言語としても、フランス語、スペイン語、中国語、アラビア語、ロシア語などがそれぞれの文化圏を形成していることを忘れてはならないだろう。そうした中で、「英語さえ分かれば」というのは幻想に過ぎない。英語万能論に対する反証として、専門家による二冊の著書を挙げておこう。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

一．医史学研究と外国語

以下、いくつかの言語と、その医史学との結びつきについて述べたい。ここで外国語というのは、外国の言語という広い意味である。

ドイツ語が、広域コミュニケーション言語の地位を失ってから久しい。しかしヨーロッパ文化を理解するには、ドイツ語とフランス語は必須であり、医史学も例外ではない。十九世紀は学問の世紀といわれるが、十九世紀後半から二十世紀初頭へかけての、ドイツ医学の輝かしい歴史を理解するには、ドイツ語を知らなければならない。かつて日本医学はドイツ医学を手本とし、私たちはドイツ語で医学教育を受けた。ドイツ語は、旧制高校の重要な科目であった。これらの事情を背景として、またドイツ留学経験者を含めて、幸いなことに医史学研究者の中にはドイツ語に堪能な多くの方々がおられる。

前掲書によると、日本ではフランス語学習者が増えているそうである。非常に喜ぶべき傾向で、フランス語を話す人たちは特別な文化圏を形成しており、英語ではそうした文化圏に入っていくことができない。私が呼吸器疾患の生化学について関心を持ったとき、リール大学に重要な研究グループがあり、その人たちはフランス語でしか論文を書かず、またフランス語圏の人たちだけの学会で発表していた。このような研究を知るには、フランス語が必要である。言語学的に見ても、英語はゲルマン語派であり、フランス語はロマンス語派で、系統を異にする。ロマンス語派への入り口としても、フランス語は重要である。

シンコーナの論文で述べたように、¹⁾コロンブスの新大陸到達の文化史的意義は大きい。本草学でも、中南米は重要であろう。その文化、研究史を知るには、スペイン語がどうしても必要である。スペイン語の重要性については、日本医史学雑誌でのべた。

私が学んだ外国語のうち、もつとも難しかったのが中国語であった。中国語が言語学で言う孤立語で、他の言語とまったく異なった言語構造を持っていること、時代的な変化がはげしく、少し古い時代の文章は歯が立たないということがその理由であった。

私たちが使っている文法は、どの外国語でも多く英文法の影響を受けているように思うが、英文法はラテン語の文法をまねて作られたものである。つまり印欧語族の言語にあてはめられて作られたので、これを中国語に適用するには無理がある。たとえば、「在」という言葉は、「我在家」（私は家にいる）、「在北京」（北京で）という二つの使い方があり、前者は動詞で後者は前置詞（介詞）と説明されているが、実際にはひとつの言葉の二面なのではないだろうか。

ピーター・フランクル氏は英語と並んで中国語を学ぶことをすすめているが、文化圏の違いからこの指摘は重要であろう。幸いなことに、日本では中国医学史の研究者は多い。中国語については、多言を要しない。中国語は、漢字を使っている点で、日本人には学びやすい言語だという意見もある。

イラク戦争が始まってから、私たちがアラビア語に接する機会は多くなった。医史学の研究に、アラビア語を理解することは重要である。国際医学史会議の報告で書いたように、アラブ医学の研究者は、ヨーロッパ人であつてもアラビア語を引用することが当然になっている。

アラブ・イスラム医学をめぐって、私たちは今までの医学史の考え方を見直さなければならぬのではないだろうか。中世初期のヨーロッパは、文化的に未開の土地であり、イスラム世界ははるかに高い文化水準を達成していた。シッパージェスの『中世の医学』¹¹とルクレールの『アラブ医学史』¹²を読み比べると、その落差は明らかである。アラブ文化がいかに現代にまで影響しているかは、コンピュータサイエンスのアルゴリズムという言葉が、アラブ数学者フワリズミーから来ていることなどからも明らかであろう。

アラブ医学は、ペルシャ医学から大きな影響を受けた。アラブ医学で病院がマリスタンと呼ばれることがあるが、

マリスタンはペルシヤ語である。ペルシヤ語は印欧語族で、アラビア語のようなセム系の言語ではないが、文字はアラビア文字が使われている。私の手元には、ある方からいただいたウイグル語の医史学史料がある。ウイグル語はかつてアラビア文字が使われたが、この史料はその時代のもので、アラビア文字で書かれている。そのため、ただいだいたのだが、現在では歯が立たない。しかしアラビア文字を手がかりとしていつか解読したいと思っている。アラビア語の初歩を学ぶことは、このようなアラビア文字を使った言語への接近を容易にするという意味も持っている。

ギリシヤ医学というとヒポクラテスとコス島が思い出されるが、ギリシヤ文化はギリシヤ本土や古典期に限らない。アレクサンドリアの医学を思い出すまでもなく、ヘレニズム期のギリシヤ文化の重要性はよく知られている。ディオスコリデスは、ローマ帝国の軍医だったと言われるし、糖尿病を記載したアレタイオスは、ローマ帝国時代のペルガモンの人である。

ギリシヤ語は、古期ギリシヤ語、古典ギリシヤ語、ヘレニズム・ギリシヤ語(コイナー)、中世ギリシヤ語、現代ギリシヤ語に分かれる。古典ギリシヤ語は、地方的な差が大きく、ヒポクラテスのギリシヤ語はイオニア方言で、プラトンやアリストテレスのアッティカ方言と多少異なっているという。コイナーは、地中海世界の共通語であった。新約聖書は、コイナーで書かれている。私たちが使っている、ギリシヤ語のアルファベットの呼び方は、中世ギリシヤ語のものである。

今までの医学史ではあまり注目されなかったが、ギリシヤ文化の担い手としてビザンツ帝国の貢献も忘れてはならないだろう。小川政修先生は、『西洋医学史』⁽¹⁸⁾の中で、ビザンツ医学を詳細に記載された。ビザンツ帝国の言語は、中世ギリシヤ語である。ロシア語に使われるキリル文字はギリシヤ語の系統で、ビザンツ帝国の二人の修道士が、布教のために作ったものである。

ラテン語は、ローマ近郊のラティウムの言葉であったが、それがローマ帝国の拡大と共に広がった。ラテン語は、古典ラテン語、後ラテン語、中世ラテン語と変わった。国際共通語という意味でリング・フランカという名前が使われるが、本来のリング・フランカは、地中海地方で漁師や小商人が他の国から来た人々と意思を通ずるために、いろいろな言語をごちゃまぜにした、まだ言語としての形をなしていない混合語、言語学で言うピジンである。しかしこれでは詳しい意思疎通には足りないのので、ラテン語が共通語として使われた。ハプスブルク家のマクシミリアンがブルゴニー公女のマリーと結婚したとき、マクシミリアンはドイツ語で、マリーはフランス語で育っていたので、二人は最初ラテン語で会話したといわれる。ラテン語は文法がやかましいが、それだけに語順は自由で、そのためラテン語の文章には漢文のような荘重さがある。ヨーロッパで、ラテン語が長く学術上の言語として使われたことはいうまでもないだろう。

ラテン語は、もうひとつの道を歩んだ。古典ラテン語・後ラテン語から俗ラテン語となって、それぞれの土地でフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語など、ロマンス語系の諸言語に発展してゆく過程である。ラテン語の文法変化の煩雑さを嫌うのはだれでも同じだと見えて、俗ラテン語への変化で目に付くのは、語尾の変化が消えることであった。

かつてヨーロッパの大学では、ヘブライ語は重要な教育科目であった。いまそうした傾向はなくなり、ヘブライ語の知識も限られた人々のものとなっているが、セム系語学のひとつとしてその知識は有用である。現代ヘブライ語は、ベン・イエフダが現代用に古典言語を復活させたもので、その過程では、航空機やコンピューターのような現代に必要な単語と共に、英語の語法が多く取り入れられた。そのため、私たちには近寄りやすくなっている。ヘブライ語のアルファベット（アレフ・ヴェート）は別々に離して書くので、続き書きのアラビア語のアルファベット（アリフ・バー）より読みやすい。母音を示す字がほとんどないことは両方に共通なので、ヘブライ語を学ぶと

アラビア語へ入りやすくなる。私は、ヘブライ文字の知識が不完全なことを恥ずかしく思っていたが、アムステルダムユダヤ歴史博物館を訪れたとき、考え方を変えた。そこにはユダヤ人の子供を対象にした、ヘブライ文字の学習コーナーがあり、子供たちが嬉々として文字を学んでいた。私の知識は、その子供たちより少しは上の筈で、独学で学んできたことも無駄ではないのだと感じた。

現在のアルファベットは、もとはフェニキア人が発明したものである。それがヘブライ語やアラビア語に使われていた間は、母音を示す文字はほとんどなかったが、ギリシャ語に使われるようになって母音を示す文字が加えられ、現在のアルファベットの基礎ができた。こうした歴史を知る上でも、セム系語学の勉強は役に立つだろう。

アラム語という名前を聞いたことがない方も多いと思う。アラム語は、紀元前、中近東地方で広く用いられた共通語である。そのため、ペルシャ帝国は、アラム語を公用語のひとつとした。ヘブライ語はユダヤ人の母語であったが、日常用語にはアラム語が用いられるようになり、ヘブライ語は宗教用語として残った。イエス・キリストが話していたのはアラム語であるとされる。アラム語にはいくつもの種類があるが、ジュンディ・シャプールで翻訳に用いられた中世シリア語は、アラム語の一種である。日本ではたくさんの語学書が出版されているが、残念なことにアラム語の入門書はほとんどない。欧文で入手したものも、ユダヤ人を対象とした、ヘブライ文字で書かれたアラム語の、入門書であった。¹⁾

オランダ語が、日本医学史上、もつとも重要なヨーロッパの言語であることはいままでもないだろう、オランダ語は、オランダ語では *Nederlands* と呼ばれるが、前には *Niederdutch* (低地ドイツ語) と書かれた。私がドイツ語とオランダ語の近縁関係を知ったのは、フォン・ガールン枢機卿に関する文献でドイツ語のウエストファールン方言で書かれた文章を目にしたときであった。²⁾ ウエストファールン州は地理的にオランダに接しているが、その方言は標準ドイツ語とオランダ語の中間のような言葉である。ドイツの学界では、オランダ語をドイツ語の一方言

としてとらえる傾向があるという。言語のこうした相互関係を知ること、外国語学習の効果であろう。

これらの広域コミュニケーション言語、あるいは大言語は、それで書かれた文献が多くあるということから学習が重要である。スペイン宮廷時代のヴェサリウスのことを調べるのに、スペイン語で書かれたバロンの著書が役に立ったし、アラブ医学者のことを調べるのに、アラビア語で書かれたイブン・アビ・ウサイビアのアラブ医学史⁽¹⁶⁾はきわめて有用であった。広域コミュニケーション言語のすべてを学ぶことはむずかしいかもしれないが、関心領域に従って、いくつかを学ぶことは意味があるだろう。

今、日本では外国語の早期教育が盛んに提唱されている。その基礎となった理論を受け入れるかどうかは別にして、早期教育論には重大な欠陥がある。それは早期教育では、ひとつの外国語しか学ぶことができないということである。それは、複言語主義に真正面から対立する。私たちを鼓舞するのは、チヨムスキーの「さまざまな言語は、基本的には全て同一の鑄型に基づいて作られており、言語間には、あるとしてもわずかな違いしか存在しない」という理論であろう。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾ それに従って種々の言語を学ぶことが、私たちの医史学を深める一手段となると思う。

二．複言語主義の実践

複言語主義を実践する方法を述べたい。

チヨムスキーの理論はさきさきのべた通りだが、実際の言語は、それぞれの歴史の変遷を経て、独特の発展をしている。どのレベルを目指すかによって、各言語の勉強法は変わってくる。ここにのべるのは、私が外国語を学んできた方法で、決して絶対的なものではない。

第一は、ある言語の一言でも覚えることである。書物、テレビ、外国旅行など、私たちはいろいろな機会に外国の言語に接することがある。それを役立てる。私が韓国・朝鮮語を勉強したのは、勤め先の大学が韓国の大学と友

好協定を結び、日本語と韓国語の協定文が配られたことからであった。また私がラテン語で第一に覚えたのは、*Derenda est Carthago*。(カルタゴは、ほろぼさなくてはならない)というカトーの言葉であった。

言葉の慣れは、むずかしく考えなくとも言葉に接していれば自然に出てくる。「こんにちわ」、「さよなら」、「ありがとう」、「水が飲みたい」、「私は医者です」などの言葉が、どの言語にもあることはいうまでもない。それをすこしずつ覚えていけばよい。

「私は医者です」という文についていうと、三つのタイプがある。「私は・医者・です」という日本語、韓国語などの言語、「私は・です・医者」という英語、ドイツ語、フランス語などのヨーロッパの言語や中国語、これには「私は」です・医者」というスペイン語などの主語が省略される言語も含む。それに「私は・医者」という、「です」にあたる言葉がない、ロシア語、アラビア語、ヘブライ語などの言語、というわけである。言語学の本には記号で書いてあるが、実際の言葉で覚える方がすつとやさしい。

第二段階は、ある言語がどんな言語か、大体の性格を知ることである。

この場合、何を優先して学ぶか、言語によって異なる。アラビア語、ヘブライ語、ロシア語などでは、まず文字を覚えなければならぬだろう。これに対して、韓国・朝鮮語のハングル文字は規則的なので、文字の表を見てみると自然に覚える。

フランス語では、発音の基礎を理解する。その代わり、動詞の細かな変化などは全部覚えようとせず、半過去、大過去などのおおまかな分類と代表的な形くらいを知っておく。もともと、すべての言語に、現在、過去、未来などのテンスがあるわけではない。アラビア語には完了態と未完了態しかないし、中国語には語形上のテンスというものがない。

文法についていうと、どんな言語でも文法は後になってできたもので、最初はず「言葉ありき」である。たと

えば、一番古い中世スペイン語ができたのは十二世紀ごろで、スペイン語最初の文法書が現れたのは一四九二年であつた。⁽²⁰⁾

文法を勉強することも必要だが、ある言語の全部を理解しようなどと無理なことは考えない方がいい。生活の必要がなく、その国の人と接する機会が少なく、外国語大学の学生でもないのに、外国語がペラペラになるなどありえない。適当に言語をかけることで十分である。若いとき、私が計画したのは、一〇年間にひとつの外国語をマスターするということがだったが、年をとってからは言語の基本が頭の中に入っているので、もつと短時間に勉強することができた。韓国・朝鮮語は日本語に近いので、むずかしいという発音は別にして、六ヶ月で大体の概要をつかむことができた。だから外国語の勉強は若いときに限るといふのは、絶対に誤りである。

この第二段階はあくまで一ステップなので、ゆっくりでいいから、言語の理解をさらに深めていく努力が必要である。

第三の段階は、努力を要する。辞書を引きながら本を一冊読むことである。これは、私が旧制高校のドイツ語の先生から教えられた方法で、「薄い本でいいから、分からない単語を全部辞書を引いて、本を一冊読みなさい」という。この方法は、言語によっては時間のかかることおびただしが、しかしその時間は決して無駄ではない。その間に、その言語の構造が頭の中に叩き込まれて行くのである。この方法のためには、普段からなるべく辞書を揃えておくとよい。

どの段階でも、必要なら先生につくのもいい。私がやっている独学よりも効率がいいし、正確に習うことができる。独学だと、とくにヒアリングが不完全である。ただ時間を決めて教室へ通うというのは案外エネルギーを要するもので、なかなか長続きしない場合がある。それぞれの好みによって決めればよい。

三．複言語主義の実例

今、アラビア語を例に、複言語主義を実際に応用してみよう。言語の初歩的な知識がどのくらい役に立つかわかる。私自身も、アラビア語の一部しか知らない。

アビセンナの著書は、アラビア語でいうと、クトゥブ・アル・カーヌーン・フィー・アル・テイップ（発音・クトゥブ・ル・カーヌーン・フィツ・テイップ（正確にはテイッビ）である。クトゥブは、キターブ（書物）の複数形、カーヌーンは「法律、規準」、フィーは「において」、「について」の意味の前置詞、テイップは「医学」で、全体の意味は、「医学における規準の本」となる。ここでクトゥブが複数形になっているのは、この書物が五冊の本からなっているからである。クトゥブ・ル・カーヌーンというのは、イダーファ構文と呼ばれる語法で、名詞が二つ続くと後ろの名詞が前の名詞を修飾する。このとき前の名詞は、定冠詞を取ることができない。つまり「カーヌーン」のクトゥブ」ということで、「規準の本」という意味になる。この形はヘブライ語にもあり、どちらにもよく出てくるので、覚えておくことと便利である。

フィーという前置詞も、医学書名によく出てくる。「医学」がアラビア語でテイップということも、知っておいていいだろう。「医者」（男性）はタビیب、その複数（三人以上）はアテイッバーウという。フィーという前置詞は属格を取ることで、文法的にはテイップに属格の語尾「一」をつけなければならないが、会話ではこの母音は発音されないで、テイップでいいと思う。

アラビア語には、アラビア文字をまず知らなければならぬが、アラビア文字で大切なのは点の数と位置である。これに注意すると覚えやすい。

アラビア語の文法で複雑なのは動詞だが、アラブ医学書の書名には動詞は出てこない。名詞と形容詞、主語と動

詞の、性・数の不一致も厄介な規則だが、これも医学書名にはあまり関係しない。文字と発音の相違は、主に定冠詞の発音によるもので、アラビア語では初歩的な知識である。

分らない単語は、辞書を引く。アラビア語には、語根と呼ぶ子音のグループ（主に子音三つ）があり、これからいろいろな言葉が生まれてくるので、辞書もこの語根から引くことになっている。そのため辞書を引くのもむずかしいが、初心者向きに語根にこだわらない辞書も出ており、簡単な単語はそれで引ける。²²

ちなみに「千一夜物語」（いわゆるアラビアン・ナイト）の原名は、「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」（千の夜と夜）である。この形は、アラビア語の数の数え方から来ている。

四．言語を学ぶ喜び

外国語を学ぶ一番の問題は、動機だろうか。言語に興味があると学びたくなるし、それがなければ機会があつても通り過ぎてしまうかもしれない。

私がヘブライ語を勉強することになったキツカケは、赤羽堯氏の『死海文書殺人事件』²³だった。この小説では、日本人の主人公がヘブライ語を使いながらイスラエルを旅行するのだが、これくらいは自分でも出来そうだと考えたのが始まりだった。ヘブライ語はたいして進歩しないが、おかげでマイモニデスの墓碑の賛辞も読めたし、イディッシュ語を読むにも役立つた。

言語を勉強する動機になるのは、言葉の美しさに対する感動かもしれない。私は子供のとき、志貴皇子（しきのみこ）の「石激る（いわばしる）垂水の上のさ蔭の・・・」という歌に、子供ながらある印象を受けた。私は、世界で一番美しい言葉は、英国のシエクスピア役者が朗誦するシエクスピアのせりふだと信じているが、日常生活で話す英語でもっともきれいな発音だったのは、ライシャワー博士の英語だった。書かれた言葉として一番感動した

のは、フランスの詩人シャルル・ペギーの書いた「シャルトルの聖母賛歌」であつた。私が知らない、ここに挙げ
ていない、美しい言葉がたくさんあるだろう。そうした美しさに接することが、言語を学ぶ喜びである。

私たちの先輩は、オランダ語の翻訳に血の出るような苦労を重ねて、『解体新書』を出版した。そのときから見
ると、私たちが接することのできる学習手段は飛躍的に多くなっている。書店の外国語コーナーへ行くと、私たちが
が知らないような言語の学習書があるし、テレビ・ラジオには語学番組がたくさんある。辞書も、テープも、CD
も、留学や外国旅行の便宜さえ、容易に手に入れることが出来る。こうした時代にあつて、私たちが外国語を学ぶ
ことにしり込みしたら、先輩たちに笑われるだろう。

参考文献

- (1) 山川智子(複言語主義解説)、河原俊明・山本忠行編『多言語社会がやってきた』、九六一―九七頁、くろしお出版、東
京、二〇〇四
- (2) 三浦信孝編『多言語主義とは何か』、藤原書店、東京、一九九九
- (3) 泉 彪之助・正橋 剛二「松原博士遺品中の一文書、イディッシュ語で書かれた医史学史料」、第一〇二回 日本医史
学会総会、平成一三年
- (4) 山本茂他編『西洋の歴史(古代・中世篇)』、ミネルヴァ書房、京都、一九九四
- (5) 山川雄一郎『英語教育はなぜ間違つたのか』、ちくま新書、東京、二〇〇五
- (6) 薬師院仁志『英語を学べばバカになる』、光文社新書、東京、二〇〇五
- (7) 泉 彪之助「キナ樹皮渡来の伝説をめぐって、チンチオン伯爵夫人説とイエズス会説」、日本医史学雑誌、四三巻二号、
一九九七
- (8) 泉 彪之助「医史学者・思想家 ペドロ・ライン・エントラルゴ」、日本医史学雑誌、四六巻三号、二〇〇三
- (9) ピーター・フランクル『ピーター流外国語習得術』、岩波ジュニア新書、東京、一九九九

- (10) 泉 彪之助「第三十六回国際医学史会議報告」、日本医学雑誌、四十四卷四号、一九九八
- (11) H・シッパীগエス著、大橋博司他訳『中世の医学』、人文書院、東京、一九八九
- (12) Leclerc, Lucien: Histoire de la Médecine Arabe, Burt Franklin, New York, 1970 (Original: 1876, Paris)
- (13) 小川政修『西洋医学史』、日新書院、東京、一九四四
- (14) Stevenson, Wm. B.: Grammar of Palestinian Jewish Aramaic, Clarendon Press, Oxford, 1998
- (15) Beaugrand, G.: Kardinal von Galen, 59s. Ardey Verlag, Münster, 1996. その他の文書(失記)
- (16) José Baron Fernández: Andrés Vesalio, Su Vida y Obra. (アンドレアス・ヴェサリウス、その生涯と業績) Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid, 1970
- (17) Ibn Abī 'Usaibi' a: 'Uyūn al-anbā' fī tabaqāt al-aṭibbā'. (医師の階層についての情報の泉), 1401. (復刻第三版、一九八一)
- (18) ノーム・チョムスキー、福井直樹・辻子美保子訳『生成文法の企て』、岩波書店、二〇〇四
- (19) 田中克彦『チョムスキー』、岩波現代文庫、二〇〇〇
- (20) ラファエル・ラベサ著、中岡省治・三浦準之助訳『スペイン語の歴史』、昭和堂、京都、二〇〇四
- (21) Annmar, S.: Avicenne, l'Or de Temps, Tunis, 1992
- (22) 本田孝一・石黒忠昭編『パスポート初級アラビア語辞典』、白水社、東京、一九九七
- (23) 赤羽堯『死海文書』殺人事件、講談社ノベルス、東京、一九九五
- (24) 斉藤茂吉『万葉秀歌(下)』、岩波新書、一九七八
- (25) Charles Réguy: Présentation de la Beauce à Notre Dame de Chartre, dans "Les Tapisseries", Poésie/Gallimard, 1957